

シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について(2)

—実験学校の開始から最初の6カ月間の経緯—

小 柳 正 司

(2001年9月18日 受理)

Some Inspections of the Correspondence of John Dewey During His Chicago Years(2)

— On Some Events During the First Six Months of the
University of Chicago Laboratory School —

KOYANAGI Masashi

1. はじめに

前稿では、シカゴ大学時代のデューイの書簡のうち、彼がまだミシガンにいてシカゴ大学からの招聘を受諾することになった1894年2月から、彼が1894年12月中旬に欧州旅行に出かける頃までを扱った。この間、デューイは1894年7月にシカゴ大学に着任し、主任教授(Head Professor)として哲学科(Department of Philosophy)の体制整備に取り組むとともに、哲学科に併設されることになっていた全米初のPh.D.を出す教育学科(Department of Pedagogy)の開設にも着手した。そして、ハーパー学長との交渉で、教育学科の体制整備の一環として実験学校を付設することをとりつけた。最初、デューイはこの実験学校をマリー・エイバー(Mary Rose Alling Aber)という女性の手に委ねようと考えたが、彼女はこれを辞退した。

結局、実験学校は1896年1月にクララ・ミッチェル(Miss Clara I. Mitchell)という一人の女性教師のもとで開校することになった。デューイは、ミッチェルとの間で実験学校の教育方針について事前に綿密な打ち合わせをおこなったようである。デューイがミッチェルに宛てた手紙には具体的な指示や方針が実にこまごまと書かれている。実験学校開設直前にデューイが抱いていた教育実践の具体像を知るうえで重要な資料である。

実験学校開校後、デューイは実験学校の実際の運営についてハイスクール教師のフランク・マニー(Frank A. Manny)という人物にさまざまな問題で相談や依頼をおこなっている。デューイがマニーに宛てた手紙からは、開校から約半年あまりの間の実験学校の様子を間接的にうかがい知ることができる。

以下では、このクララ・ミッチェルとフランク・マニーのそれぞれに宛てたデューイの書簡を通して、実験学校の最初の6カ月間の経緯を見てみることにしたい。

2. クララ・ミッチェル

デューイは1895年6月にヨーロッパ旅行から帰国していたが、帰国後ニューヨーク州ハリケーンにある山荘にしばらく滞在し、7月には妻アリスの実家があるミシガン州フェントンの滞在していた。そして、8月に第二子のエヴリンがマラリア熱にかかり、デューイはミシガン州バトルクリークのサナトリウムでエヴリンの療養に付き添うことになり、そのためデューイがシカゴに戻ったのは1895年の9月中旬になってからであった¹⁾。この間、デューイはハーパー学長やタフツと手紙で仕事上の連絡をとっている²⁾。

10月の新学年の開始とともに、教育学科は学科として正式に授業を開始した。デューイは、実験学校の開設を急ぐべく準備にとりかかり、クック郡師範学校のパーカーから推薦されたクララ・ミッチェルという女教師に実験学校の教師をやってくれるよう依頼の手紙を書いた。11月6日付の手紙でデューイはクララ・ミッチェルに実験学校の基本的な目的、開校時期などを説明している。開校直前の準備段階でデューイが実験学校をどう構想していたかを知るために、手紙の全文を引用しておこう。

教育学科に付設する学校は、最終的には幼稚園からアカデミーまでとなります。この学校は第一義的には教育方法の学校 (a school of methods) であって、二義的にのみ実習校 (a school of practice) の役目をはたします。つまり、その第一の目的はカリキュラムの系統的な編成を試みることであり、心理学と実践の両面から方法を開発しテストすることです。クリスマス明けの冬学期 [1月開始] に初等部門をオープンさせたいと思っています。この学校は小規模なものですが、今年度 [6月終了] はプランの実行可能性を示すだけで充分だと思っています。貴女の推薦を特にパーカー大佐からいただきました。私は金曜日 [11月8日] にドワジャック (Dowagiac, MI) に行く用事があります。そのときバトルクリークに出向いて貴女にお会いし、この件で話し合えればと思っています。もし貴女の御都合でお会いできないようでしたら、この件についてお考えいただき、折り返し至急に電報をください。もし御都合がよく、この件について興味がおありでしたら、私は喜んで貴女とお会いいたします³⁾。

クララ・ミッチェルはもともとパーカーのクック郡師範学校で教師を努めていたが、この時点ではミシガン州のバトルクリークで教師をしていた。デューイが彼女に実験学校の教師を引き受けてくれるよう依頼したのは、上の手紙にもあるようにパーカーからの推薦によるものであった。

続いて11月12日付の手紙でデューイは、クララ・ミッチェルに具体的な採用条件を提示している。仕事は新年を迎えてからで、児童は6歳から9歳までの25人、報酬は今年度末 [6月末] までの半年で800ドルが大学から支払われること、授業時間はまだ未確定だが午前の9時から12時までと、郊外の野外観察やミュージアム訪問などで週に何回か午後の時間もあること、特定分野のスペシャリストを適宜に雇って補佐させること、以上をミッチェルに伝えている。そして、学校の教室に使

う部屋はまだ見つかっていないが、ハーバー学長が1月に移転予定のバプティスト教会の日曜学校のあとを使えばよいと言っており、周囲には園芸（gardening）に使える広い土地があると記している。そのうえでクララ・ミッチェルに、無理にとは言わないが仕事を引き受けてくれればありがたいと期待を表明している⁴⁾。

続いて11月14日付のクララ・ミッチェル宛の手紙で、デューイは彼女が実験学校の教師を引き受ける気持ちになっていることに謝意を述べ、そのうえで実験学校の開設にあたっての具体的な手立てについて細々とした指示を書いている。まずはじめに、裁縫（sewing）についてはまだ充分考えがまとまっていないが、ミシンを使った作業が有効ではないかと述べ、必要と思われる物品のリストを作成するよう指示している。つぎに、料理（cooking）では妻アリスの意見を入れて生徒一人一人にオープンを用意したいと述べている。工作では、幼い子どもには木よりも厚紙の方がより複雑な工作ができるだろうから望ましく、子どもに工作への動機づけを与えるものとして機関車のような玩具の制作を提案している。さらに織物で、簡単な手織り機が使えないか試してみたいと述べている。そしてデューイは自分の考えをクララ・ミッチェルにより深く理解してもらうためであるが、自分がクック郡師範学校でおこなっている講義のシラバスを同封し、さらに数日中には自分の教育哲学の概略を送るとも書いている⁵⁾。

次の11月24日付クララ・ミッチェル宛の手紙では、学校に必要なさまざまな備品と購入費の見積を書いて送っている。見積は生徒数40人を前提に作成されている。（実験学校開設時の実際の生徒数は16人であった。）そこにあげられている備品のリストは昨年エイバー夫人が用意したものだとデューイは書いている。ということは、エイバー夫人はデューイが欧州旅行に出かける前の昨年11月末から12月初めの頃に、デューイから実験学校の仕事を引き受けてくれるように依頼され、いったんはその気になって、学校に必要な備品のリストまで作成したということであろう。子ども用の椅子とテーブルはエイバー夫人の発案だとデューイは書いている。備品のリストを見ると、織物、ハウスの制作、料理などの諸活動に必要な材料と道具一式、工作活動（industrial work）に必要な道具と作業台など、後に実験学校の教育実践を代表する諸活動のための備品が数多くあげられており、既にエイバー夫人によってそうした諸活動が構想されていたことが推察される。また、必要とされる教室としては工作室（industrial work room）、体操室（Gymnasium）、描画室（drawing room）、集会室（session room）、復唱室（recitation room）があげられている⁶⁾。

さらに12月14日付のクララ・ミッチェル宛ての手紙⁷⁾では、実験学校の開校について本日決定がくだされることになること、今年度中の開校は無理かと心配していたが、当初予定していたよりも規模を縮小してなんとか開校にこぎつけられそうなことをミッチェルに知らせている。そして、ミッチェルが提案した織機（loom）の使用について賛成しながらも、資金不足で織機の購入を延期せざるをえないこと、当面は椅子とテーブルのほか、最小限の備品（大工仕事用のベンチと道具、調理器具一式、裁縫具）で出発することになることを知らせている。窓辺の花台（window garden）や水槽など急を要しないものは、むしろ子どもたちが必要性を感じるようになるのを待

つほうがよいと述べている。デューイは、子どもたちに料理への動機づけを与えるために週1～2回学校で昼食を準備させることにしたらどうかと提案している。そして、自分の長男のフレッドに学校で料理を学びたいかと尋ねたところ、「そうしたいなとずっと思っていたよ。お母さんが病気になってもおいしいものをつくれるから」という返事が返ってきたことを紹介しながら、子どもは家庭的な条件のゆえに料理に興味をもつようになると述べている。11月12日付の手紙にあったバプティスト教会の日曜学校のあとを校舎に使えるさうだという話しは、新しい教会が1月末にならないと完成しそうもないので実現不可能となり、そのためどこかに家を借りることを考えているとデューイはミッチェルに知らせている。そして、彼女にその借家に住む気があるかどうか尋ねている。

同じ12月14日付の次の手紙⁸⁾で、デューイは広い庭つきで3部屋ある南向きの個人住宅を見つけたと書いている。多分、先の手紙を早朝に書いた後、家を探しに行ったのであろう。そして、本日午後の理事会で実験学校の開校が承認されるとハーパー学長から知らせが入ったことを追記している。

続いて12月31日付のクララ・ミッチェル宛ての手紙⁹⁾でデューイは実験学校の開校を知らせるチラシを彼女に送っている。実験学校の開校を知らせるチラシの全文は以下のとおりである。

当大学は、教育学科 (Department of Pedagogy) の指導のもとに、まもなく小学校 (Primary School) を開校します。直接の担当教師はクララ・ミッチェル嬢です。生徒は6歳から8歳まで、または最初の3学年相当の児童、25人を予定しています。入学申込みは受付順に受理されます。入学申込みは、詳細の問い合わせともども、シカゴ大学哲学・教育学主任教授ジョン・デューイ宛てに。授業料は1クォーター12ドル。書籍代は不要の予定。

注意：学校は1月初旬に開校予定。開校の正確な日時と所在地は数日内に決定する予定。

3. 実験学校の授業実践上の基本方針

11月14日付のクララ・ミッチェル宛の手紙でデューイは、数日中に自分の教育哲学について書き送ると書いていたが、実際には11月29日付と12月22、24日付と12月24日付の3回にわたって書き送られている。

ここで「教育哲学」と言われているものは、実験学校において実際に授業実践を展開するうえでのおおまかな基本方針を述べたもので、いわゆる教育の理論哲学を論じたものではない。同時期に書かれたとされている『大学附属小学校組織案』¹⁰⁾と比べると記述は体系的でなく、むしろ具体的に何をどうするかをひとつひとつ想定しながら授業実践上のアイデアを書き出したメモというものに近い。

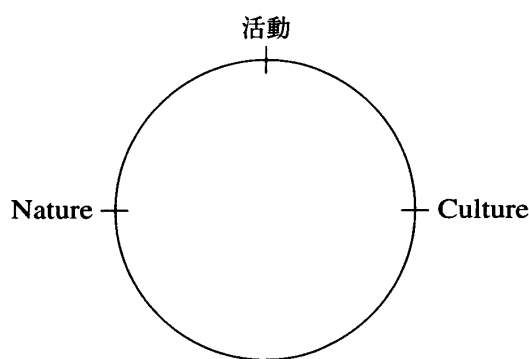
教科の分類と相關

さて、最初の11月29日付で送付されたノート¹¹⁾では、主として教科の分類 (classification) と

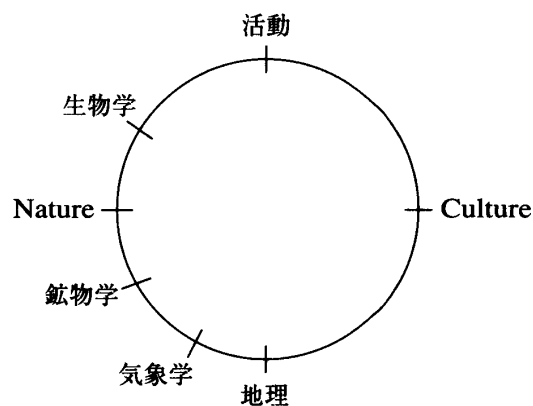
相関 (correlation) についてデューイの基本的な考え方が論じられている。それを説明するため、デューイは次のような図を使って説明している。

まず円の頂点に出発点としての子どもの活動 (activity) がある。(図1参照) 子どもの活動については、デューイはそれが単に子どもの関心を引きつけるからとか、子どもが喜んで取り組むからとかいう理由で、それを出発点にすることに反対している。子どもの活動は最初から「社会的なもの」、つまり社会生活のなかで何らかの目的をもって取り組まれる活動でなければならないとされている。だから、デューイは子どもたちがただ単に教室で「お店やさんごっこ」をして、紙のお金で買い物をしながら計算問題の練習をするというようないわゆる経験学習なるものは否定している。こうした「ごっこ遊び」は、一部の子どもを除いて、大部分の子どもたちにとっては「歪んだ欲求に火をつけることにしかない」と断じている。デューイが想定している活動というのは「ごっこ遊び」のような子ども向けの真似事ではなく、実際に子どもたちが学校で自分たちの昼食を準備したり、教室で自分たちが使う備品を自分たちで作る大工仕事に取り組んだりというように、子どもたちに本物の仕事 (オキュペーション) をおこなわせることである。そして、そうした本物の切実さをもった仕事の中で、子どもたちは自分たちで必要な材料を購入し、数量や金銭の計算をするということがおこなわれる。

しかし、これらの活動はあくまでも出発点にすぎず、デューイの実験学校ではこうした活動のみによってすべての学習がおこなわれたのではない。むしろ、これらの活動を出発点として、小学校としてはかなり高度な教科の学習が用意されたのである。すなわち、これらの活動から活動の物理的側面としての自然と、活動の社会的側面としての文化とに円は大きく区分される。(図1参照) そして、円の左側の自然学習 (nature studies) としては、料理からは食物としての種子と肉の研究が、大工仕事からは木材の研究が生じ、これらによって植物と動物に関する生物学の学習へと進んでいく。そこからさらにいろいろな生物の生育条件の分析がおこなわれ、鉱物学、気象学へと導かれる。そして、円の左側の自然学習と右側の文化学習 (culture studies) とが地理において出会うようになる。というのも、地理は鉱物学と気象学の科学であるとともに、動物相と植物相を人間の社会生活への影響という観点から取り上げるからである。(図2参照)

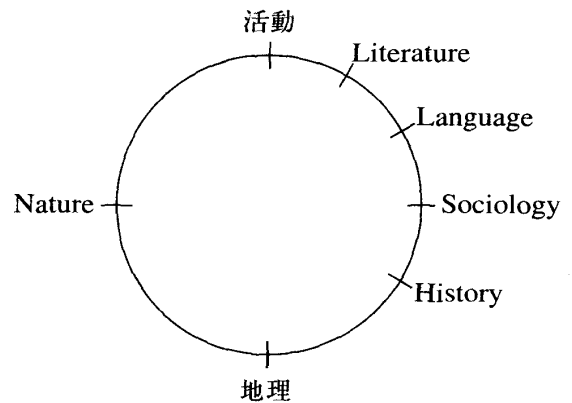


【図1】



【図2】

次に円の右側の文化学習に移る。活動はそれ自体がひとまとまりの表現であり、社会参加の一形式としての社会的コミュニケーションであるとされ、その第一の表現形式として文学 (literature) と言語 (language) が位置づけられる。(図3参照) ここでデューイは言語の機能を3つに分けている。(1)それ自体が表現活動としての言語、(2)知識や情報をやりとりする手段ないし用具としての言語、(3)他者の言語表現の理解、鑑賞——本来の「文学」。そして、青年期以前の



【図3】

子どもたちが文学や言語に興味をもつのは、自分自身の直接的な表現活動としての言語か、活動遂行上の手段、用具としての言語に対してであり、第3の意味での本来の「文学」の教育は青年期以前の段階では無用だとしている。したがって、青年期以前の段階での言語教育では、子どもたちが自分自身の活動を遂行する必要から話したり書いたり読んだりすることと、他の人々の活動や生きざまを知るための伝記や歴史や科学的な読み物が中心となる。

文学教育に関連して、デューイは「文学はそれ自体としてあるものではなく、伝達またはコミュニケーションであり、それが伝える内容にこそ〔子どもの〕興味は生じる」と述べている。そして、かつてクック郡師範学校の出身者であるクララ・ミッチェルに対して「もしかしたら間違っているかもしれないが」と断りつつも「クック郡師範学校では読み書きはそれ自体としてあるものではないことが十分に認識されていながら、依然として『文学』は神話などの形をとってそれ自体としてあるものだということが当然視されていることに私は驚いた」と率直に述べて「ヘルバルト主義の汚染」を嘆いている。そして、文学教育の実践上の最大の課題は、子どもが自分自身で表現したいと思っているような事柄を、まさに文学として表現しているような教材を探し出すことだと述べている。

文学、言語に続いては社会生活そのものが位置づけられる。これは、自分たちの日常生活を支えているさまざまな産業や輸送、通信といった社会の諸機能を子どもたちに理解させること、すなわち広い意味での社会学の学習である。そして、歴史は「拡大された社会学」として、すなわち「現在の社会的諸活動をより深く理解するための入り口」として学ばれる。したがって、例えば古代ギリシア・ローマの歴史は歴史そのものとして学ばれるのではなく、現在の社会生活のどれか典型的な側面を映し出す標本として学ばれる。(図3参照) この歴史学習の考え方は、後にシカゴ大学実験学校の教育実践を特色づける代表的な理論となっていく。

以上のほかに、デューイは算術、物理、化学を活動の形式やプロセスに関係するものとして位置づけている。それらはさきの図で言えば、円周上に位置づくものではなく、円周に対する半径の関係で表現されるものだとしている。例えば、化学は染色といった活動をより効果的に遂行するため

の方法を知るために学ばれる。また、物理は活動に含まれるエネルギーの経済的な調整に関係して学ばれる。そして、算術はそうした活動の規制のための最も抽象的な形式として学ばれる。例えば、料理の際の計量や温度管理として。

教科の分類と相関を以上のように説明したあと、デューイは「興味のシーケンス」について簡単に説明している。ここでは学校の年間の学期(quarter)にあわせて、秋、冬、春の順に、季節の変化を基準にして年間の「興味のシーケンス」を示している。なお、子どもの発達を基準にしたシーケンスについては別途示すとされているが、それを記述した文書は見あたらない。

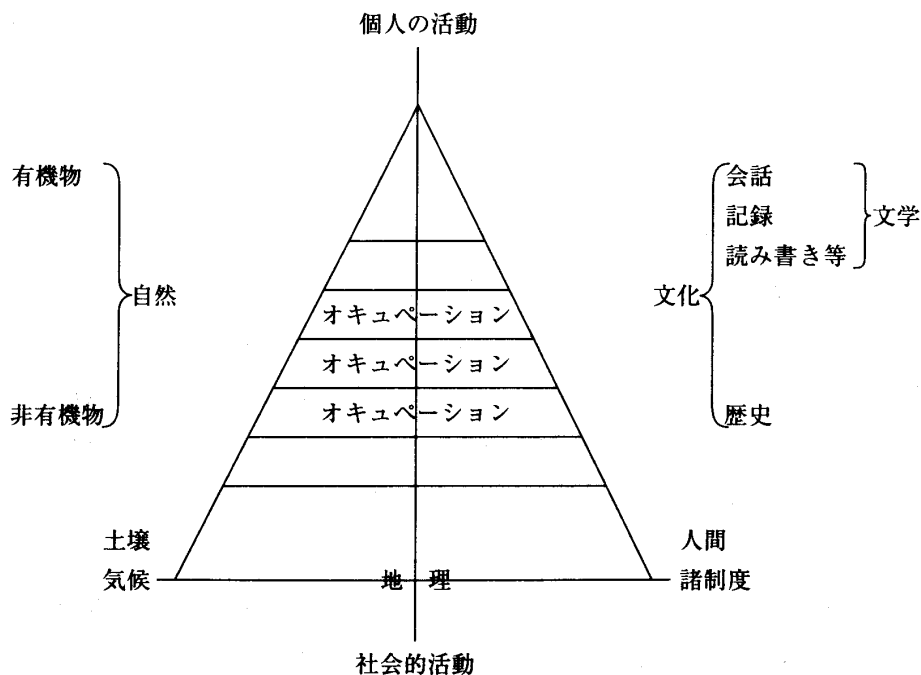
まず、秋は自然が生命に糧を与える時期とされ、それゆえ食料の収穫、貯蔵、分配、流通などに関わるオキュペーションに興味に向けられる時期とされる。具体的な学習内容としては、例えばいろいろな植物の種子の仕組み、鳥や獣による種子の拡散、鉄道、船の役割など。

冬は生命の防御の時期とされ、衣服と住居、食品の加工などに関するオキュペーションに興味に向けられる時期とされる。

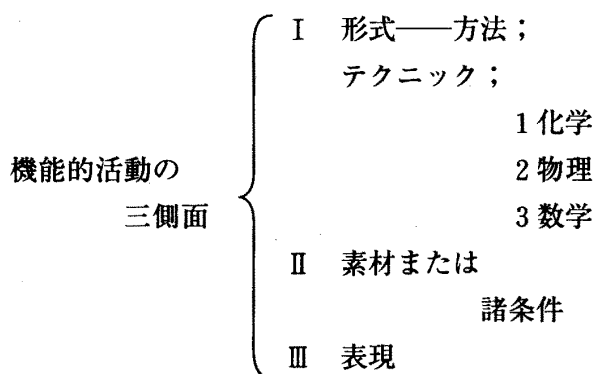
春は生命の解放の時期であり、生命のプロセスに興味に向けられる時期である。すなわち、生命の持続と成長、太陽、水、空気との関係などに注意を向ける時期である。

このように季節の変化を基準にした「興味のシーケンス」を示したあと、デューイは季節の変化を単に環境条件の変化としてのみ捉えないように、むしろ人々の生活の営みにおける心理的態度と社会的態度の変化として捉えるようにと注意をうながしている。

次いで12月22、23日付でクララ・ミッチェルに送付されたノート¹²⁾で、デューイは再び教科の相関について自分の考えを述べている。そして、次のような図を描いている。



【図4】



【図5】

ここでデューイは「あらゆる相関の中心は生命 (Life) である」と述べている。ここで言われている「生命」とは、生命体による物質代謝の過程という広い意味で言われている。すなわち「自然のエネルギーと物質を生命へと解放し、この生命を自然へと還元して生命を再生産する運動」のことである。そして「相関の具体的な中心」は「子どもの生活」であるとし、その「生活」を①方法 (how) ②素材 (material) ③表現 (expression) の三側面に分け、①方法 (how) には「化学」「物理」「数学」が、②素材 (material) には「植物学」「動物学」「鉱物学」「気象学」等が、③表現 (expression) には「歴史」「文学」(literature)「地理」が相当するとしている。(図5参照)

まず最初に、活動の「方法」(how)に関わる教科群として、「化学」では生命活動に見られる非有機的なものと有機的なものとの相互作用を扱うとされ、「物理」はこれらの相互作用をより効果的に統制する手段(道具)に関わり、そして「数学」はその統制のエコノミーに関わるとされる。(図5のI)

つぎに活動の「素材」(material)に関わる教科群では、例えば大工仕事の素材である木材や、料理で使うミルク、塩、穀物などを出発点にして、それらを一つ一つ分析して、それらが形成された場所や条件などを調べ、最終的には鉱物学、気象学、動物学、植物学などの諸科学へとさかのぼっていくことになる。(図5のII)

最後に、活動の「表現」(expression)に関わる教科群として、「文学」については先の11月29日付のノートと同様に「文学」をそれ自体として扱うのは「迷信」だとして退け、あくまでも社会的な場を通じた「生活の表現」として扱うべきだとして、自分と他者との経験のやり取り、すなわち社会的コミュニケーションの過程の中に口頭および文字による言語の使用を位置づけるべきだとしている。「歴史」についても11月29日付のノートに記されていたように、「歴史」はあくまでも「現在の社会生活の分析」を主たる目的として学ばれるべきだと述べている。「地理」については、これも11月29日付のノートにあったように「自然と文化の連結環」だと位置づけ、土壌の性質や地形の浸食等は人間自身の生活の営みに入り込むものとして見るときはじめて子どもたちにとって意味をもつものとなると述べている。そして「地理は最も基底的な社会学となるように私には思われ

る」と付け加えている。

さて、デューイが示した以上のような「教科の中心統合と相関」の考え方においては、その基本的な原理は彼の次の言葉に集約されていると思われる。すなわち「子どもの興味の発展は主題（subject）の真に科学的な展開にきわめて密接に従って生じるものである¹³⁾。」これは11月29日付のノートを送付した際に同封されたミッチェル宛の手紙に書かれている言葉である。この手紙でデューイは「燃烧」をテーマにした学習を示唆しており、その際、燃烧に関する一連の学習が科学的に順序正しく系統的におこなわれるように教材や実験を用意することができれば、子どもたちは自ら積極的に疑問を発したり問題解決に取り組んだりするようになるものだと述べている。このようにデューイは、子どもの興味と教育内容の順序性・系統性とを密接に関係づける形で教科の中心統合と相関を構想していたのである。

さて、実験学校の開校がまじかにせまった12月24日の日付で、デューイはクララ・ミッチェルに「燃烧」と「読み物教材」に関するメモを送付している¹⁴⁾。「燃烧」については先に11月29日付のミッチェル宛の手紙でも触れられていたが、どうやらデューイは開校当初の具体的な授業計画として、料理から自然に発展していく形で「燃烧」を主題にした一連の学習を予定していたようである。彼は11月29日付のミッチェル宛の手紙で次のように書いている。

燃烧の過程はそれだけで子どもの興味をひくものだが、料理に密接に関係するものでもあるから、一連のつながりをもたせる糸になりそうである。……さて、私が思うには、子どもの興味の発展は主題（subject）の真に科学的な展開にきわめて密接に従って生じる。つまり、燃烧についての諸問題と、それらに対応したさまざまな材料や実験がごく自然な形で提示できるように、学習の系統的な順序がはっきりと示されれば、そうした順序にかなり密接に対応する形で、子どもたちが自ら積極的に疑問を発したり、あるいは疑問をもつように容易に促されるであろうと思われる¹⁵⁾。

ここで注目すべきことは、デューイが「子どもの興味の発展は主題（subject）の真に科学的な展開にきわめて密接に従って生じる」と述べている点である。すなわち、学習活動は子どもの興味や関心の赴くままに展開するのではなく、むしろ学習内容それ自体がもつ科学的な順序性や系統性に従って学習活動は展開すべきであり、そのような系統的な学習活動の展開にともなって、主題に対する子どもの興味も発展していくものだ。デューイはこのように学習内容の系統性こそが子どもの興味の発展を促すと考えている。同様の考えは、12月24日付の手紙でもミッチェルに次のように書き送っている。

あらゆる「事実」は一定のプロセスに関係づけて捉えるべきであり、それらを相互に関係づけて捉えるべきではない。後者に基づけば、[子どもの]想像力をいかにして活動させ引き寄せたらよいかわからなくなる。私はしばしば、一つのプロセスがたとえ大雑把にしか理解されていなくても、プロセス自身が自らに適した素材を一種の自然選択によって自分に引き寄せ同化していくさまを見て、驚くことがある。理論的に言えば、これは数年前に教育学でさんざん言われた「分析と総合」「演繹と帰納」「特殊と一般」などなどについての問題の解決になると思う。真の一般（generic）はプロセスであり、このプロセスが特殊をもたらし、そして特殊は一般を内容豊かに多様な姿に分化させる¹⁶⁾。

ここでもデューイは、諸事実を相互に関係づける一般的な原理やプロセスの重要性を強調しており、子どもの想像力はそうした原理やプロセスの理解によって拡大すると見なしている。

以上のようにデューイは、子どもの学習過程は学習する主題や内容の科学的順序性・系統性に基づいて展開されるべきだ主張しており、子どもの興味や想像力の発展もそうした学習内容の順序性・系統性によってこそ保障され则认为している。

4. フランク・マニー

デューイがシカゴ大学教育学科に開設した小学校（実験学校）は、1896年1月の第1週の月曜日に最初の授業をおこなった¹⁷⁾。生徒は6歳から9歳までの16人（開校初日に出席した生徒は13人）で、教師はクララ・ミッチェル一人であった。ただし、体操（gymnastics）はシカゴ大学女子体育科主任のアンダーソン嬢（Miss Anderson）が大学の体育館で指導した。その後まもなく、教育学科の大学院学生のスメドレイ（Mr. F. W. Smedley）が手工（manual training）担当の教師として加わった。

1936年に出版された『デューイ・スクール』の著者であるメイヒューとエドワーズによれば、実験学校の最初の6カ月は「試行錯誤の期間」であったという¹⁸⁾。そして、その間の事情を次のように説明している。

学校をどう組織していったらよいのか、前例となるプランはまったく存在しなかった。そのため、最初の六カ月の経験は、大部分が、なにをなすべきでないかを示すものであった。それで、最初の六カ月が終了したところで、教育目標、教育計画、教育方法が練り直された。それまでに成功したことと、それよりも特に失敗したことにもとづいて、カリキュラム、組織、管理について多くの修正がなされた¹⁹⁾。

特に大きな修正は「オールラウンド・ティーチャー」の体制が放棄されたことである。当初、実験学校では一人の教師が異年齢の子どもたちを相手に全科目を担当する「オールラウンド・ティーチャー」の体制が理想だと考えられていた。しかし、最初の6カ月の試行でそれは失敗に終わり、1896年10月の新学年度からは「スペシャリスト・ティーチャー」の体制がとられ、それぞれ専門科目を担当する教師が、ほぼ年齢ごとにグループ分けされた生徒たちを教えるという体制がとられることになった。こうした体制の変更については、既に別の論文で若干の考察を加えた²⁰⁾。

この時期、デューイはシカゴにあって、当然のことながら実験学校の発足に立ち会っていた。この時期のデューイの書簡を見ると、彼はフランク・マニー（Frank Addison Manny）というハイスクール教師と頻繁に手紙のやり取りをしており、その中で発足まもない実験学校のことについていろいろと書いている。実験学校の最初の6カ月間については、実践記録等の資料がまったく残されていないため、この試行期の実験学校の実際の様子をうかがい知ることは難しいが、その点で、フランク・マニー宛のデューイの書簡は間接的ながら役に立つ。

フランク・マニーはミシガン大学の卒業生で、多分その関係でデューイとは以前から知りあいで

あったらしい。この時期、マニーはミシガン州モリーン (Moline, Michigan) でハイスクールの校長をしていた。彼はハイスクール・エクステンション (High-school Extention) に熱心な教師で、彼の依頼でデューイは1896年2月にモリーンに行って公開講座をおこなっている²¹⁾。また、ミシガン州のハイスクール・エクステンション運動をシカゴ大学としてどの程度支援できるかを調査するため、デューイは再びモリーンを訪れ、フランク・マニーに意見を求めたりしている²²⁾。

理科教師の採用について依頼

1896年3月16日付のフランク・マニー宛の手紙²³⁾で、デューイは次年度(1896年7月開始)に向けて実験学校で新たに教師を採用するつもりだが、だれか優秀な教師がいないかとマニーに相談している。特に求めているのは、科学の分野で高い教育を受けていて、科学の内容を初等段階向けに適合させることができる人である。実験学校が開始されて2カ月半が経過した段階で、デューイは早くも「オールラウンド・ティーチャー」の理想を軌道修正して、理科担当の「スペシャリスト・ティーチャー」の採用を図ろうとしていたことがわかる。

さらにデューイは、求める教師の資質を次のように表現している。

現在の先進的な教授方法で教えることができる優秀な教師はすぐに見つけられるし、高度な知識と専門能力をもったカレッジ卒業生もすぐに見つけられるけれども、この両方を兼ね備えていて、しかも新しい教授法の開発に着手できる人というのは、どこかにいないものだろうか²⁴⁾。

ここにあるように、デューイが求める教師の資質は、第1にカレッジで高度な専門教育を受けていること、逆に言えば、師範学校でもっぱら教授法の実践的な訓練ばかりを受けてきた人をデューイは求めていなかったこと、そして第2に、自らが身につけている高度な専門科学の内容を初等段階の子ども向けに教材開発をおこない、新しい教授法の開発を自らおこなえることであった。ここに示された教師の資質は、後にデューイが「教育における理論と実践」(1904年)²⁵⁾や『教育科学の源泉』(1929年)²⁶⁾等において展開する教職の専門性 (teaching profession) の主張を先取りしており、いわばその原形と言ってもよい²⁷⁾。

ちなみに、マニーはデューイの依頼に応じてキャサリン・ドップ嬢 (Miss Katharine Elizabeth Dopp) を推薦している²⁸⁾。彼女もマニーと同じミシガン大学の卒業生 (1893年卒) で、ちょうどこの時にはマニーのいるイリノイ州モリーンで教員養成所の校長をしていた。しかし、デューイは彼女を採用せず、キャサリン・キャンプ嬢 (Miss Katherine Barker Camp, 後に Katherine Camp Mayhew) を理科担当の教師として採用することにした。その理由は、ドップ嬢の教育学的経歴よりも、キャンプ嬢の理科と家庭科における実践経験のほうが、実験学校にとってはるかに必要なものと考えたからである²⁹⁾。キャンプ嬢もミシガン大学の卒業生 (1894年卒) で、この時にはニューヨークにあるプラット教員養成学院 (Pratt Institute) で理科を教えていた。

現職研修教員として

しかしながら、この時期のデューイとフランク・マニーとの関係を重要なものとしたのは、1896年7月から1897年6月までの1年間、デューイがマニーをシカゴ大学教育学科に現職研修教員として受け入れ、その間、彼に助手の地位を与え、実験学校の実務を依頼したことである。

1896年3月11日付の手紙³⁰⁾で、デューイはマニーに3月20日より前に次年度の仕事の予定を決めないようにと知らせている。そして、4月9日付の手紙³¹⁾で、大学は次年度にマニーに助手手当 (assistantship) を与え、授業料を免除したうえに500ドルを支給すると決定したこと、大学院の授業は夏学期 (7月～9月) から受講してよいことを知らせている。

4月15日付の手紙³²⁾でデューイは、マニーに依頼する職務の内容を5点ほどあげている。①実験学校の備品購入などの実務、②他の諸学校からの資料やレポートの収集 (デューイは「教育学科は大学内ばかりでなく大学外の諸学校とも緊密な関係をもつべきだ」と述べている)、③ハイスクール・エクステンション事業の補助、④ユニヴァーシティ・エクステンションの教育学コースの授業の補助、具体的には、ロックアイランド郡師範学校での公開講座と、シカゴ市の教員のためのコース、⑤秋学期 (10月～12月) の大学院課程の教育学の授業³³⁾の補助。

この手紙でデューイは、教育学は「実験室の科学」であり「焦点を置くべきはわれわれが開始した観察学校 [実験学校] である」と述べて、実験学校では「大学院学生の中の優れたスペシャリストが化学や地学など、それぞれの専門の知識を公立学校でも利用できるように適合させるという問題に取り組むべきである」と実験学校の役割を説明している。そして「大都市のユニバーシティの教育学科はどうあるべきかという問題に取り組むのに私の手助けとなる人物が欲しいのだ」とマニーに大きな期待を寄せている。デューイにとって、ユニバーシティ (研究大学) の教育学科はもとから教員養成をおこなうところではなく、教育理論の実験的な開発に取り組むべきところであった。そして、その中心課題は、ユニバーシティ (研究大学) での最先端の諸科学の研究成果に基礎づけられた初等教育のカリキュラムの開発にあったのである³⁴⁾。先に見たデューイが求める実験学校の教師の資質といい、ここに述べられている大学院生の取り組むべき研究課題といい、この点をデューイはしきりに強調しているのである。

実験学校の実践の取り組みについて

デューイは1896年5月10日付のフランク・マニー宛ての手紙で、実験学校が目下「表現」 (expression) の問題に取り組んでいることについて、次のように書いている。

われわれが目下取り組んでいる教育上の問題は、常に [子どもの] 表現から出発して、そこから知識が派生してくるようにするにはどうしたらよいかということである。とりわけ、読・書・算の初歩を、コミュニケーションの社会的衝動ないしは子どもがそれ自体のために取り組む構成的活動と結びつけるにはどうしたらよいかということである。活動全体に芸術的衣装 (artistic dress) を与えるにはどうしたらよいかという問題については、相対的に取り組みが遅れている。美的興味は子ども時代にはとても強いものだが、現在のところそれを活用するための教育方法は存在しない³⁵⁾。

デューイは同じ手紙で、ここ数週間、学校は教師が手を出さなくてもうまくいくようになり始めたと書いている。実験学校のやりかたに子どもたちもなんとか慣れ始めてきたということであろう。そして、デューイはクック郡師範学校の教師であるフローラ・クック (Flora Juliette Cooke) が実験学校を参観して、子どもたちが「結果」のためではなく直接の興味から作業しているのを見るのは初めての経験だと彼女が述べたことを紹介して、これはただ表現の機会と手段に強調を置くだけで、あとは子どもたちに任せていることによるものだと論じている³⁶⁾。

続いてデューイは5月26日付のフランク・マニー宛ての手紙³⁷⁾で「われわれは今年一つのことを実証してみせた」と述べている。それは、教授内容をまず最初に、料理や大工仕事のような子ども自身の生活経験に関連づけて提示するように工夫すれば、子どもの注意 (attention) を容易に引きつけることができるということである。それによって、学校の雰囲気も一変し、自由な社会的環境が生まれるともデューイは述べている。

しかし、この手紙でデューイは「歴史」と「理科」の教材の組織化については、いまだに何もなされていないと述べ、「授業は相対的に言って、子どもたちの本来の能力にかみ合っておらず、明らかにそれよりもレベルが低い」と断じている。ここには、実験学校が子どもたちの間に「表現」を中心とした「自由な社会的環境」をつくり出すことにはある程度成功してきたが、そこから「歴史」「理科」といった本格的な教科の学習が思うように進展していないことへの懸念が示されている。「私たちは今や、私たちがこれまでにつくり出した好条件 [[「表現」や「自由な社会的環境」] をしっかりと活用しなければならない。」デューイはそう述べて、「私たちの自由な諸条件のもとで子どもたちが最初の3年間にどれくらいの範囲と質の知識を習得しうるかは、教育内容 (subject matter) を組織する教師の力量にかかっている」と強調している³⁸⁾。子どもの自由な表現から出発して、そこから本格的な教科の学習が進展してくるようになるためには、子どもの生活経験に結びつく的確な教材開発と、先を見通した綿密な学習指導計画が必要なわけで、ここでデューイは次年度 (1896-97年度) に向けた実験学校の研究課題をはっきりと教育内容の組織化に焦点づけているのである。

この課題に取り組む体制づくりのためにデューイは、6月20日付のフランク・マニー宛ての手紙³⁹⁾で、次年度に向けて有能な教師を探すこと、実験学校に適宜来て教材開発の相談にのったり実際に授業をしたりするさまざまな学問分野の大学院生を何人か見つけること、定期的に授業をしに来てくれる専門家を何人か見つけること、できれば授業計画にある程度の責任をもってくれる人を見つけていることなどをマニーに要請している。

そして、7月22日付の手紙⁴⁰⁾で、次年度には40人の生徒を集めるつもりであり、そうなれば12歳児を何人かもつことになるだろうから、「歴史」と「文学」の組織化に取り組みたいと記している。ただし、実際には10月の新学年度の開始の時点で生徒は6歳から11歳までの32名であった。

学校の移転

実験学校は6月で年度が終了した。デューイは7月23日にニューヨーク州シャトーカ (Shautauqua, New York) のサマー・スクールで講義をした後⁴¹⁾、ニューヨーク州ハリケーン (Hurricane, New York) にある自分の山荘で家族とともに夏をすごした。その間、9月末にシカゴに戻るまで、デューイはフランク・マニーと頻繁に手紙をやりとりし、実験学校の移転や、10月からの新学年の開始に向けた準備などについて、マニーに事細かに指示をしている。

7月22日付でシャトーカからマニーに宛てた手紙⁴²⁾で、デューイは学校がいま使用している借家は8月15日まで借りているが、その後は大学近くのバプティスト教会にはいることになるので、それまでにマニーがシカゴに来ていれば、引越の仕事を引き受けて欲しいと依頼している。

7月28日付でハリケーンからマニーに宛てた手紙⁴³⁾で、デューイは実験学校も大学と同じ10月1日に開始することになるが、教師のクララ・ミッチェルは9月初めにシカゴに戻り、新任のキャサリン・キャンプは9月中旬にシカゴに行くことになろうと知らせ、そのうえで再度8月15日の引越の件を依頼している。

8月2日付のマニー宛ての手紙⁴⁴⁾で、デューイはバプティスト教会の理事長のマーシュ (Mr. Marsh) に次年度は幼稚園段階の開設はあきらめ、大部屋を臨時以外は使わないから家賃を月35ドルにしてくれるよう手紙を書いたと述べ、そのことをマーシュ氏に会って確認してほしいとマニーに依頼している。そして、家賃は40ドルでもかまわないと記している。さらにデューイは、学校が賃借りしているピアノの移動のことや、特注で机を20個製作してもらうことなどについて、マニーに細かな指示を書き送っている。この手紙の文面から、マニーはこの時点でシカゴに来ていたものと思われる。

ところが、8月11日付のマニー宛ての手紙⁴⁵⁾で、デューイはバプティスト教会の建物を借りることができなくなったことを知らせ、急いで借家を探すようにマニーに依頼している。そして、8月16日付の手紙⁴⁶⁾で、デューイは自分に心当りのある物件をいくつかあげている。そのうえで、35ドルで30～35人くらいの生徒しか収容できない家を借りるよりも、40ドルで40人の生徒を収容できる大きな家を借りたほうがよいと付け加えている。さらに9月4日付の手紙⁴⁷⁾で、デューイはマニーが最適と思う物件を3～4軒リストアップするように指示し、9月9日付の手紙⁴⁸⁾で、教育学科の准教授のバルクリー (Julia Bulkley) に物件をみてもらうように指示している。

続いて9月14日付のマニー宛ての手紙⁴⁹⁾で、デューイは新学期に向けた学校の案内状の原稿を既にバルクリーに送ったから、案内状に学校の所在地を記入できるよう、借家をすぐに決定するようにと指示している。同じ手紙でデューイは、地下室を食堂にしたほうがよいとか、配管はクララ・ミッチェルとキャサリン・キャンプが来るまで変えないほうがよいとか言っているのだから、たぶん、この時点でキンバーク街5714番地 (5714 Kimbark Ave) の住宅を借りることにデューイはほぼ同意していたのであろう。同じ9月14日付でデューイはマニーに電報も発しており、至急バルクリーに会って借家を決めるように、そして机の件を急ぐことと、椅子を15脚追加発注することを指

示している。

デューイは9月21日にニューヨーク州ハリケーンの山荘を去って⁵⁰⁾、9月26日に妻アリスの実家があるミシガン州フェントンに到着している⁵¹⁾。その日にマニーに宛てて書いた手紙⁵²⁾で、デューイは学校の所在地を「ロサリーコート (Rosalie Court) ではなくキンバーク街にしたのは私にとっても救いだっただ」と書いている。理由はわからないが、大学に近いということだろうか。しかし、キンバーク街の借家はこの年の12月までしか使用せず、年末にはロサリーコートに再度の引越をすることになる。

なお、9月26日付のこの手紙で、デューイはキャサリン・キャンプは9月28日にシカゴに到着し、自分は9月28日か29日にシカゴに戻ると書いている⁵³⁾。

註

- 1) John Dewey to William Rainey Harper, August 23, 1895; John & Evelyn Dewey to Alice Chipman Dewey, September 11, 1895; John Dewey to Alice Chipman Dewey, September 12, 13, 1895. この手紙でデューイは、アナーバーにいる妻アリスに「可能ならば来週火曜日にはシカゴに戻らねばならないだろう」と書いているが、「来週火曜日」は9月17日に相当する。
- 2) John Dewey to William Rainey Harper, July 20, 1895; John Dewey to James H. Tufts, August 1, 1895; John Dewey to James H. Tufts, August 9, 1895; John Dewey to William Rainey Harper, August 23, 1895.
- 3) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 6, 1895.
- 4) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 12, 1895.
- 5) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 14, 1895.
- 6) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 24, 1895.
- 7) John Dewey to Clara I. Mitchell, December 14, 1895.
- 8) John Dewey to Clara I. Mitchell, December 14, 1895.
- 9) John Dewey to Clara I. Mitchell, December 31, 1895.
- 10) John Dewey, *Plan for Organization of the University Primary School* (1895?), *Early Works of John Dewey* vol. 5, pp. 224-243.
- 11) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 29, 1895.
- 12) John Dewey to Clara I. Mitchell, December 22, 23, 1895.
- 13) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 29, 1895.
- 14) John Dewey to Clara I. Mitchell, December 24, 1895.
- 15) John Dewey to Clara I. Mitchell, November 29, 1895.
- 16) John Dewey to Clara I. Mitchell, December 24, 1895.
- 17) 1896年1月16日付『シカゴ大学週報』に「教育学科に付設された小学校が月曜日の朝開校した」とあり、1896年5月10日付のデューイのマニー宛の手紙には「私たちの学校は1月の第1週に始まった」とある。
“The Model School,” *University of Chicago Weekly*, 16 January, 1896, p. 707; John Dewey to Frank A. Manny, May 10, 1896.
- 18) Katherine Camp Mayhew & Anna Camp Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago, 1896-1903* (New York: Appleton Century Company, 1936), p. 7.
- 19) Ibid., pp. 7-8
- 20) 拙稿「シカゴ大学実験学校の実践記録：1896-1899年」『鹿児島大学教育学部紀要（教育科学編）』第51巻，2000年3月，121-128頁，参照。

- 21) この公開講座をデューイは前年の10月に引き受けている。John Dewey to Frank A. Manny, October 4, 1895. また以下の書簡を参照。John Dewey to Frank A. Manny, January 4, 1896; John Dewey to Frank A. Manny, January 16, 1896; John Dewey to Frank A. Manny, January 25 1896; John Dewey to Frank A. Manny, January 30, 1896. デューイは2月8日にモリーンに行き、そこで“Epochs of Child Life”というテーマで講話をおこなった。なお、シカゴ大学のユニヴァーシティ・エクステンションから出された「教育倫理学」と題するデューイの公開講座の講義シラバスには、この講話のシラバスが第5講義として集録されている。“Lecture V. Epochs of Child Development,” in *Educational Ethics: Syllabus of a Course of Six Lecture-Studies* (Chicago: University of Chicago Press, 1895), *Early Works of John Dewey* vol. 5, pp. 298-299.
- 22) John Dewey to Frank A. Manny, February 24?, 1896; John Dewey to Frank A. Manny, March 4, 1896.
- 23) John Dewey to Frank A. Manny, March 16, 1896.
- 24) Ibid.
- 25) John Dewey, “The Relation of Theory to Practice in Education” (1904), in *Middle Works of John Dewey* vol. 3, pp. 249-272.
- 26) John dewey, *The Sources of a Science of Education* (1929), *Latter Works of John Dewey* vol. 5, pp. 1-143.
- 27) 教職の専門性に関するデューイの主張については、拙稿「デューイにおける教育実践と教職の専門性」『日本デューイ学会紀要』第36号, 1995年, 134-139頁参照。
- 28) John Dewey to Frank A. Manny, March 26, 1896.
- 29) John Dewey to Frank A. Manny, May 10, 1896. 次も参照, John Dewey to Frank A. Manny, July 22, 1896.
- 30) John Dewey to Frank A. Manny, March 11, 1896.
- 31) John Dewey to Frank A. Manny, April 9, 1896.
- 32) John Dewey to Frank A. Manny, April 15, 1896.
- 33) この授業の題目は「セミナー：教育方法、総論及び各論」となっており、その内容は「さまざまな教育方法の根底にある原理について理論的な考察を加える」となっている。*The University of Chicago Annual Register: 1896-1897* (Chicago: The University of Chicago Press, 1897), p. 174.
- 34) この点については、拙稿「デューイ・スクールの真実-シカゴ大学実験学校はどのような学校だったのか-」『鹿児島大学教育学部紀要 (教育科学編)』第50巻, 1999年3月, 199-205頁, および「シカゴ大学実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学構想-師範教育から教育科学の確立へ-」『鹿児島大学教育学部紀要 (教育科学編)』第50巻, 1999年3月, 217-229頁, 参照。
- 35) John Dewey to Frank A. Manny, May 10, 1896.
- 36) Ibid.
- 37) John Dewey to Frank A. Manny, May 26, 1896.
- 38) Ibid.
- 39) John Dewey to Frank A. Manny, June 20, 1896.
- 40) John Dewey to Frank A. Manny, July 22, 1896.
- 41) William James to Alice Howe Gibbens James, July 23, 1896. この手紙でウィリアム・ジェームズは、シャトーカで7月22日の2時30分からのデューイの講義を聴いたと書いている。
- 42) John Dewey to Frank A. Manny, July 22, 1896.
- 43) John Dewey to Frank A. Manny, July 28, 1896.
- 44) John Dewey to Frank A. Manny, August 2, 1896.
- 45) John Dewey to Frank A. Manny, August 11, 1896.
- 46) John Dewey to Frank A. Manny, August 16, 1896.
- 47) John Dewey to Frank A. Manny, September 4, 1896.
- 48) John Dewey to Frank A. Manny, September 9, 1896.
- 49) John Dewey to Frank A. Manny, September 14, 1896.

- 50) John Dewey to Frank A. Manny, September 17, 1896.
- 51) John Dewey to Frank A. Manny, September 26, 1896.
- 52) Ibid.
- 53) Ibid.